

パプリカの栽培技術の確立

第2報 側枝の着果数制御が生育・収量に及ぼす影響

深田直彦・黒木利美・富永 寛 (宮崎県総合農業試験場)

Naohiko FUKADA, Toshimi KUROGI and Hiroshi TOMINAGA:
Establishment of Cultivation Technique on Paprika

2. Effect of the Collateral Control of the Fructification Number on Growth and Yield

パプリカは、イタリア料理ブームや消費者の健康志向を背景に年々需要が伸びている。しかし、着果習性や担果量の限界等不明な点が多いため、国内での生産はまだ少ない。このことから、筆者らはパプリカの産地形成を目指して、安定生産技術の確立を急いでいる。本報では、側枝の着果数制御が生育・収量に及ぼす影響について述べる。

1. 材料および方法

供試品種は‘スピリット’を用いた。試験区は、主枝2本仕立てで各節着果を共通の条件とし、側枝の着果数を変えることで設けた。すなわち、主枝の各節から発生した側枝に1果ずつの着果を目標とする対照区に対し、着果しなかった主枝の節から発生した側枝だけに1果着果させる着果制限区と、各節の側枝に制限なく着果させる着果無制限区を設けた。

側枝の摘心は、対照区と着果制限区は3節とし、着果無制限区は特に決めることはせず、着果に応じて適宜整理した。なお、着果無制限区の側枝は果実の重みによる折れを防ぐために捻枝を行った。いずれの区も収穫を終えた側枝は、1節残して切り返した。播種は2000年8月18日に行い、50穴セルトレイで育苗し9月13日に定植した。畦幅は180cm、株間は20cmとした。施肥はa当たり、基肥がN 3.0 kg、P₂O₅ 2.5kg、K₂O 2.0kgで、追肥はN 4.0 kg、P₂O₅ 2.6 kg、K₂O 4.5 kgとし12回に分施した。最低温度は18℃設定で管理した。収穫は12月8日から2001年6月29日まで行った。

第1表 主枝の状態 (株当たり)

区名	収穫開始2週間後 ^z				栽培終了時 ^y				茎葉重 (g)
	主枝の状態				主枝の状態				
	長さ (cm)	節数	節間長 (cm)	茎径 ^x (mm)	長さ (cm)	節数	節間長 (cm)	茎径 ^x (mm)	
対照区	96.9	18.2	5.3	9.0	160.6	26.7	6.0	11.6	1,231.0
着果制限区	96.9	17.6	5.5	8.8	162.8	27.1	6.0	11.7	1,227.9
着果無制限区	95.4	17.7	5.4	9.1	160.5	26.6	6.0	11.8	1,284.1

注) z: 12月22日, y: 7月4日に調査, x: 主枝の5~6節位間

第2表 着果無制限区の側枝の状態

着果した側枝の状態			
節数	長さ (cm)	着果数	着果節位
5.1±0.32 ^z	26.3±9.49	1.5±0.10	3.7±0.21

注) z: 平均値±標準誤差

第3表 総収量と可販果収量 (a当たり)

区名	総収量			可販果収量			
	果数	重量 (kg)	比	重量 (kg)	比	可販果率 (%)	1果重 (g)
対照区	6,126	974.9	100.0	779.6	100.0	80.0	162.8±2.05 ^z
着果制限区	5,630	962.8	98.8	730.8	93.7	75.9	172.4±2.37
着果無制限区	7,331	1,201.9	123.3	910.1	116.7	75.7	167.3±1.99

注) z: 平均値±標準誤差

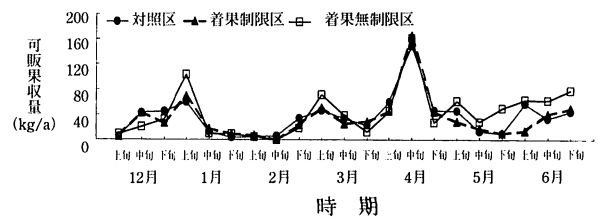
2. 結果および考察

生育: 主枝の生育は、栽培期間をとおして区による大きな違いは認めなかった (第1表)。着果無制限区の側枝果は、主に3~4節に1~2果の着果が認められた。また、着果後は側枝の伸長が抑えられたため、無摘心であっても茎葉が混み合うことはなかった (第2表)。一方、果実の重みによる側枝の折れは、捻枝を行った着果無制限区ではみられず、むしろ対照区と着果制限区で散発的にみられた。

収量: a当たりの総収量は、収穫果数の多かった着果無制限区が対照区より約23%多く、着果制限区は対照区よりわずかに少なかった。一方、可販果の状態をみると、着果制限区と着果無制限区の可販果率は対照区に比べ約4%低かった。このため、可販果収量の比較でも着果無制限区は最も多かったが、着果制限区は総収量の比較以上の減収を示した (第3表)。

時期別収量はいずれの区も同様の変動で推移したが、収量の‘山’を示す時期に、着果無制限区は特に多い傾向があった。加えて着果無制限区は、5月以降、各旬とも連続して多収を示した (第1図)。

以上の結果、パプリカで多収を得るには、主枝に着果させるだけでなく、各節の側枝にも1~2果着果させることが必要だと考えられた。その場合、果実の重みによって枝が折れないように、側枝を捻枝する整枝法が有望である。



第1図 時期別の収量 (可販果)